

自由学園初等部

近年、文部科学省が木造校舎を見直す取り組みを進め、「木の学校づくり」が注目されている。一九三〇年に建てられてから現在まで、代々校舎を受け継いできた、ユニークな校舎を紹介する。



自分たちの教室をきれいに磨く。昼食後の掃除の時間(3点提供・自由学園)

前自由学園理事長
市岡揚一郎
text by Youtchiro Ichoka

木とともに生活する、 しあわせな子どもたち。

西

武池袋線「ひばりヶ丘」駅を降り、七、八分歩くと、武蔵野の面影を残す、緑の多い住宅地の奥に学校法人「自由学園」がある。一九二一年(大正十一年)、ジャーナリストの夫婦、羽仁吉一と吉子とが「知識の詰め込み」を嫌い、子どもたちを「生活させること」こそが本来の教育——という思いで創立した学校である。正門をくぐり、二分も歩くと、昭和初期か大正の時代にタイムスリップした気分になる。平屋の、のどかな木造建築物が数棟横たわっており、子どもたちの楽しげな歌声が聴こえてくる。へまわれを愛す、主は強ければ、われ弱くとも……。小学校に相当する初

等部である。

木造建築群は、深い設計思想を語っている。中央に山形の屋根を持つ食堂があり、その前には芝生を挟むように左右対称の二つの棟がある。いずれも大谷石の柔らかなグレーと木材の落ち着いた茶とが溶け合い、窓を大きくとって外光をたっぷり採り入れている。建物の前に開ける芝生と小さな池……。大正時代、日本を訪れた米国の建築家、フランク・ロイド・ライトは帝国ホテルや東京豊島区にある自由学園明日館などを設計したが、この木造の建物群はその高弟である遠藤新の設計によるもので、二〇〇三年には東京都選定歴史的建造物に指定された。



建物群の中央に位置する食堂。目の前には手入れの行き届いた芝生が広がる



毎日午前の授業が終わると、父母が交代で作る昼食を楽しみに、初等部の生徒全員が食堂に集まる

食堂が建物群の中心になっているのは、「子どもたちに温かい食事を食べさせたい」という創立者の願いによるもので、近づいてみると、すべての寸法が子どもたちの背丈と目線に合わせて作られていることがわかる。たとえばテーブルと椅子は大人用よりも低いし、食堂奥にある台所流し場なども子どもの手が届くように設計されている。

食事は一年生から六年生までが同じテーブルについて交わるし、配膳も後片付けも生徒がする。皿洗いも生徒の当番。建物から家具・什器までが子どもの自治生活を支えるための設計である。

自由学園キャンパス全体の広さは、一〇万平方メートル。樹木は合計四千本あり、幼稚園の幼児たちから小学生、中学生、高校生、大学生にいたるまで木とともに生活している。大学生はキャンパスの樹木一本くを管理し、男子部生は埼玉県名栗にある植林地で樹木の世話をし、キャンパス内にある木工所で木工にこそしむ。女子部生はキャンパス内で採れた薪で約三百人分のご飯を炊く。大釜をまぜる木製のしゃもじはスコップほどの大きさがある。

休み時間になると、初等部の生徒たちは外に飛び出し、木登りをする。登ってもいい木が定められているが、子どもたちはモミジの木に登りやすいことを知っている。のみならず、春になれば、紅色の花を咲かせ、プロペラのような赤い実をつけ、くるくると回りながら落ちてくることも、そして落ちた種が芝生いっぱいには赤い双葉を出すことも知っている。誇りにしているのは、校庭にそびえるケヤキの大木。四年に一回ある前回の美術展では、その姿をオブジェにして展示した。会場の体育館天井に突き刺さるほどのその巨大さに、来客たちは腰をそらせて仰天したものだ。

木は切られ建材となった後も、呼吸している。梅雨どきはいっぱい水分を吸って木肌に汗をかくし、乾いた冬には木肌を凍と張る。よく手入れすれば、木は半ば永久に人間の役に立ってくれる。子どもたちはこのこともまた知っていて、床や壁の掃除を怠らない。

いちおか よういちろう 1937年上海生まれ。
50年自由学園男子部入学。
60年、大学に相当する最高学部を卒業、
日本経済新聞社に入社。
ロンドン、ワシントン勤務を経て取締役論説主幹を
務めたあと、水木楊の名で作家として独立。
『田中角栄—その巨善と巨悪』
『青いあひる』『東大法学部』など著書多数。

学校法人自由学園
■東京留米市学園町1-8-15